

On the Structure of *Saddhā* in the Pāli Canon

Yohei Furukawa

This paper attempts to sketch the structure of the *saddhā* (Sanskrit *śraddhā*) used in the Pali Canon. This structure is based on a combination of interpretations of *saddhā* (belief, faith) in the Buddha's enlightenment among the Three Jewels, *saddhā* (belief) in the Buddha's teaching (Dhamma), *saddhā* (conviction) in the liberation which results from ascetic life, *saddhā* (confidence) which results as a merit of making offerings. *Saddhā* is sometimes used in conjunction or parallel with the word for 'desire', however, based on the cases stated earlier, 'desire' cannot be included in this interpretation. The use of 'desire' as a meaning for *saddhā* in the Pali Canon should be restricted.

初期仏教における saddhā (信) の構造

古川 洋平

はじめに

本論では、初期仏教文献の一つパーリ聖典において「信」を意味するサンスクリット語 śrad-√dhā を語源とする語（名詞形 saddhā, 形容詞形 saddha. 以下、本語を「ś」「śする」とも表記する）に関して、「何に対するどのようなśなのか」を明らかにすることを主眼とする筆者のこれまでの研究をもとに、初期仏教におけるśの枠組みを簡潔に提示していく。

先行研究については、これまで長きに渡り研究が積み重ねられてきている。諸研究のうちで重要なものだけでも Köhler[1973], Hacker[1963], Jayatilleke[1963:382-400], Gethin[1992:106-116], 藤田 [1992] などがあり、枚挙に暇がない。上記のうち、Köhler[1973], Hacker[1963] はヴェーダ文献を中心とする広範なインド語文献の用例を取り上げるものの、パーリ文献については部分的な考察にとどまる (Köhler[1973]については後述)。Jayatilleke 氏はそれまでの諸研究をふまえパーリ聖典中のśを①理解や認識に基づく cognitive なś、② pasāda (<pra-√sad, 淨信) や bhatti (信愛), pema (愛好) と並置される affective なś、③修道論の原動力となり五根中の精進根に結びつくような conative なś という、3つの側面から捉える (Jayatilleke[1963:387])。氏はこのうちの①を重視するが (同 [1963:396-399])、氏が設定した分類を用いた後の研究では②、時に③にśの本質を見る傾向が認められる¹⁾。もっとも、Jayatilleke 氏による分類は、śの位置付けや類義語に依拠したものである²⁾。pasāda, adhimutti (<adhi-√muc, 信解)

をもとに「知的な Ś」を重視する藤田 [1992:140] も、これに准ずる。

上記の諸研究は、Ś を併用される類義語に基づいて理解しようとする点に共通性があり、類義語の理解如何によって Ś 理解も変わってしまう³⁾。従って、Ś (あるいは仏教的「信」) の大枠を理解するには有益であっても、Ś の本質的理解に直接資するものとは言えない。Ś を正確に把握していくためには、本語を品詞に関わりなく網羅的に抽出した上で、各文脈の中から Ś そのものの特徴を掬い上げていく態度が必要となる。

1. パーリ聖典中の Ś の語義と格関係

パーリ聖典中の Ś の語義を理解するにあたっては、Köhler[1973]、そして後藤 [2007] が考察の基礎となる。PW は Ś に対し Vertrauen (信頼)・Zuversicht (確信)・Glaube (信仰) 等の「信」の方向性の他、Lust (欲望)・Verlangen (欲求) といった「欲望」の方向性の意味を設定する。Köhler 氏はヴェーダ文献中に見出される祭式や祭式の報酬の支払いの際に使用される Ś が Glaube というよりも祭官への Vertrauen (信頼)、そして Spendefreudigkeit (布施を好むこと) の意であること強調し、Spendefreudigkeit がパーリ聖典中の Ś にも受け継がれていると述べる (⇒4. 2.)。これに対し後藤敏文氏は、『リグ・ヴェーダ』中の Ś の全用例を整理する中で、「欲望」(論中では「欲求」としての Ś の古さに関する Köhler 氏の見解を根拠が無いと指摘し、氏が祭式のメカニズムへの「信頼」を「欲望」としての Ś の類型である Spendefreudigkeit の次元に引き付けて議論し過ぎる点を批判する。後藤氏によれば、ヴェーダ文献中の Ś の動詞語形は一貫して「信を置く」「信ずる」「信頼する」の意味を持つ語である。「欲望」の意味は二次的な展開であり、古くは遡らない (後藤 [2007:578, 569, 571])。阪本 (後藤) 純子氏は、古代インド祭式における Ś を、神々・祭主・祭官の間の「信頼」と祈願の実現を「信じること」を基軸とするものとして捉え、「欲望」としての Ś を想定しない (阪本 [2008:110-109] ; 阪本 [2015:92-94])。

Köhler[1973:3] が論拠として取り上げる Ś を「欲望」としても定義する文献 (Amarakośa など) は、紀元後数世紀以降の成立である。従って、それ以前に

形を整えていたパーリ聖典中のŚに「欲望」の意味を設定する決定的な論拠にはなり得ない。同じく比較的後世に成立した上座部大寺派の『清浄道論』（5世紀頃）・説一切有部の『俱舍論』（5世紀頃）は、saddhā / śraddhāをpasāda / prasāda等を用い「信」の意味を基軸として理解する⁴⁾。この特徴は、śraddhāをabhiḷāṣa（欲求）、「意欲（chanda）に拠り所を与えることを働きとする」とも説明する『阿毘達磨集論』（5世紀頃）においても異ならない⁵⁾。パーリ聖典中のŚの意味を理解していくには、まず「信」を基本的な意味に据え、後世「欲望」とも定義される語として捉えていく視点が求められる。

Śの取る格関係について、現存する最も古いインド語文献『リグ・ヴェーダ』中のŚの動詞形は与格dat.（人物/事物）との結びつきが強い。Ś（動詞形）のdat. 支配は『ヤジュル・ヴェーダ』やブラーフマナ文献以降も継続し、さらに後世のパーリ聖典等の文献では、acc. 支配が顕著になる。後藤氏は、このdat. からacc. への格支配の展開に関して、元来√dhā（置く）の目的語であったśrād（n. sg. acc.）が√dhāと共に複合動詞化した可能性を指摘する（後藤 [2007:576, 569-567]）。

パーリ聖典において、Śは動詞形をはじめ様々な品詞で使用されるが、動詞形と名詞形の取る格は同一ではない。まず、パーリ聖典中のŚ（動詞形）は上述の如く人物/事物（acc.）、そして人物（gen. 形）を取り、gen. 形（事物）を取る例は確認できない。Ś（動詞形）が人物（acc.）を取る例は経蔵中比較的後世に成立したと考えられているApに1例のみであり（Ap I, p.56[12.1] Cf. von Hinüber[1996:60-61].）、仏・法・僧（acc.）をŚする『分別論』の事例を含めても（Vibh p.371）、ごくわずかである。従って、聖典中のŚ（動詞形）の取る格はacc.（事物）及びgen. 形（人物）が基本となる。このうち、Ś（動詞形）+gen. 形（人物）は、實際上その人物（gen.）の発言内容（言葉）をŚすることが意図されており、Ś（動詞形）のacc. 支配を前提とした用法と考えられる（⇒古川 [2015]）。

名詞形saddhāは動詞形の用法をもとに考えるのが基本となるが、取る格は常にloc.（人物/事物）である。パーリ聖典中には、saddhāがその対象を示す際、明確にacc. / gen. 形を取る例は認められない。註釈文献においても、ごく

稀である。saddhāが人物 / 事物 (loc.) を対象とする場合、人物当人や事物そのものを「信頼する」「信じる」が意味上の出発点となる。最も用例の多い如来 (loc.) に対する saddhāは、次節で取り上げる修道論と結び付けられ、三宝のうちの仏 (如来) の覚者性に対する Ś と同質のものとして用いられているように思われる。

2. 修道論における Ś

2.1 仏道修行における Ś の位置付け

パーリ聖典中の仏弟子が抱く「信」が三宝、特に仏に対する「信」を基軸としていることについては、特に異論はないであろう。信仰の在り方の視点から見ると、優婆塞とは三宝に帰依した者であり、優婆塞が如来の覚りを Ś することで saddhā を具えた者となる (S V, pp.394f. その他 cf. 注9)。優婆夷の場合も同様であろう。仏・法・僧に対し用いられる Ś の事例は偈中に散見されるのみである (S I, p. 102, Thī 286 etc. その他前述の『分別論』の事例も参照)。三宝に対する場合には、pasādaの使用が比較的多い。仏 (如来) に対する pasādaの内実は、上記の優婆塞のケースと同じく、如来の覚者性に対するものである (M I, p. 320, D II, p. 93, etc.)。

先行研究によれば、仏弟子が抱く Ś は解脱に至る修道に関する文脈の中で使用されるケースが多い。本 Ś は、諸徳目とともに併用される Ś と、単独使用される Ś とに大別することが出来る。

前者に関して、Ś は五根・五力・五有学力・五精勤支・五財・七正法・七力・七財などの修行徳目の一つとして用いられる。上掲の修行徳目は、様々なテーマに応じて生天や解脱に資するものとして取り上げられ、これらはいずれも Ś に始まり慧に終わる構図になっている (Cf. 藤田 [1992:93-100], Jayatilleke[1963:396-398])。本 Ś は、例えば五根中の信根の場合、「如来の覚りを Ś する」(Tathāgatassa bodhiṃ saddahati)、つまり如来の覚者性を信じることとされる (S V, pp. 196-197 etc. Cf. 藤田 [1992:95f.])。その他、Ś は好み (ruci) ・ 言い伝え

(anussava)・様相の考究 (ākāraparivattakka)・見解の認容 (ditthiniijjhānakkhanti) と共に、智 (ñāna) や慧、知見に関する語と対置的に用いられる場合があり、それだけでは仏弟子が解脱を達成できないものの一つとして扱われる (M II, p.170, 218, etc.)。以上をふまえれば、Śは修道に必要な要素でありながら、解脱に直接結びつくわけではないものとして位置付けられていると言える⁶⁾。

後者の単独使用されるŚもまた、同じ構図の中で用いられる側面を有する。例えばD 2, M 27 などでは、在家者が如来の説く法 (dhamma) を聞き、如来 (loc.) に対する saddhā を獲得した上で出家を志し (D I, p. 63, M I, p. 179)、三学を修めて解脱知見を得るまでの修行道が説かれる。この点から、出家者はいずれも如来に対する saddhā を有していると考えられる⁷⁾。

如来に対する saddhā は、如来の法を聞くこと (聞法) と結びついている。M 95 では、saddhā が生じた出家者が如来に近づき、近侍し、聞法し、法を記憶に留め、熟考し、容認し、最終的に慧によって最高の真実 (paramasacca) を貫徹し、見ていく (M II, pp. 172f.)。正法を聞くことはŚの食 (āhāra) であり (A V, p. 115)、正法を聞くことの円満から saddhā の円満がある (A V, p. 116, 118)。

Śと聞法をめぐる釈尊と仏弟子の関係については、M 34 が参考になる。本経では、牛飼いが牛達に河の流れを渡らせる比喩が説かれる。無知な牛飼い (外教の沙門・バラモンを喩える) が不適切な渡し場から牛達を渡そうとし結果的に牛達は河の流れに吞まれてしまうのに対し、智慧ある牛飼い (釈尊を喩える) は時期や渡し場の状況を見据え首領牛から生まれただけの子牛までを順次に渡し、最終的にすべての牛達を渡り切らせている。次の引用は比喩の後のまとめ部分である。

〈引用①〉

... ahaṃ kho pana bhikkhave kusalo imassa lokassa kusalo parassa lokassa, kusalo māradheyassa kusalo amāradheyassa, kusalo maccudheyassa kusalo amaccudheyassa. tassa mayhaṃ bhikkhave ye sotabbaṃ saddahātabbaṃ

maññissanti, tesam taṃ bhavissati dīgharattaṃ hitāya sukhāyā ti. (M I, pp. 226-227)
 (釈尊)「……しかも比丘等よ、私はこの世に通じており、あの世に通じており、魔の領域に通じており、魔でない領域に通じており、死の領域に通じており、不死の領域に通じている。比丘等よ、そういう私の〔言葉〕聞かれるべきもの、śrad-√dhāされるべきもの(信じられるべきもの)と考えるであろう者達、彼等にとってそのことは長きにわたる利益・楽のためになるだろう」と。

引用の後、比喩に登場する既に渡り切った首領牛が阿羅漢、これから渡り切る力ある馴らされた牛が不還者、同じく牡の子牛・牝の子牛が一来者、力の弱い子牛が預流者、生まれたばかりの子牛が随法行者・随信行者 (saddhānūsārin) であると説明され、それぞれが牛飼いの指示のもと魔の流れを断ち切り彼岸に達すると説かれる (M I, p. 226)。

上掲例に見られるように、仏弟子は導き手としての釈尊の語る言葉、即ち法を聞き、Śすべきであると考え、彼岸に渡っていく。釈尊の法を聞き、Śすることが有益な結果に繋がるのは、釈尊自身が彼岸に至る道に通達した者、自ら法を体得した覚者であるからである⁸⁾。以上を敷衍すれば、仏弟子は、仏(如来)の覚者性をŚし、覚者としての仏の説く法をŚすることを通して、彼岸たる解脱・涅槃に至る道を歩んでいく存在と言えるであろう⁹⁾。

2.2 Śと宗教的境涯

仏弟子を宗教的境涯の視点から見ると、阿羅漢、随信行者、そして信解脱者 (saddhāvimutta) のŚに特徴が認められる。阿羅漢は信根等の五根を円満した者とされ、それよりも軟弱(不完全)な五根を具えた者として不還者乃至預流者、随法行者、随信行者が続く (S V, pp. 200-201)。また、assaddha (不信の者) は、解脱者である阿羅漢にはなれない (A III, p. 433)。この点から言えば、阿羅漢は仏弟子の中で「Śを最もよく具えた者」に位置付けることが出来る¹⁰⁾。

随信行者は如来 (loc.) に対する単なる saddhā、単なる愛情が生じ、五根が生

じた者とされる (M I, p. 479)。S 25.1-10 によると、眼等の諸のもの (諸法) を釈尊の説くように無常等であると説き、*adhi-√muc*する者が随信行者、同じ対象を知見するのが預流者である (S III, p. 225)。註釈は随信行者を四向四果のうちの預流向に相当させるから (Cf. Ps III, pp. 189-191)、預流果にあたる預流者よりも下の境涯に位置する随信行者は、釈尊が説く眼等の無常を理解するまでには至っていないことになる。

随信行者よりも上の境涯に位置する信解脱者 (Cf. Ps III, pp. 189-191) は、如来 (loc.) に対する *saddhā* が入り込み (Tathāgate *saddhā* *nivīṭṭhā*)、根が生じ、確立している者であるとされる (M I, p. 478)。この *saddhā* の表現は M 47 にも認められる。本経では、比丘が如来に質問をし、如来の言動を見、説く法をよく知った上で (*abhi-√jñā*)、「世尊は正しく完全に覚った者である」等と師について *pra-√sad* している (*satthari pasīdati*)。そしてそれを言い換える形で、「如来に対して *saddhā* が入り込み、根が生じ、確立したものとなる時、比丘等よ、これが根拠のある、見ることを根本とする堅固な *saddhā* と言われる」。本 *saddhā* は、世間の何ものによっても衰退しない (M I, p. 320)。以上をふまえれば、信解脱者とは、仏の説く法をよく理解した上で、仏が覚者であるという、仏に対する確固不動な *saddhā* を具えた者と言える。

上掲三者の *Ś* を総合すると、如来に対する *Ś* は如来の説く教えの理解を通じて強化され、宗教的境涯の高まりと共に確立していくものであるということになる。仏弟子達は、各々に特徴を持ちつつも、最終的には五根をすべて円満した阿羅漢となることを目指していく。仏弟子にとってのあるべき *Ś* は、所謂「盲信」ではない (Cf. 藤田 [1992: 140])。

しかしながら、上述はあくまで修道論上の理想的な流れである。仏弟子の中には、如来に対する *Ś* を適切に発揮できない者も存在した。その代表例が、比丘の中で「*saddhā* (信) に志向 / 傾倒している者」(*saddhādhimutta*) 第一とされるヴァッカリである。伝承によれば、ヴァッカリは釈尊を常に傍らで見守るために出家したほどの人物であったが、釈尊に対する *Ś* が強過ぎる余り、観察行

(vipassanā) を適切に遂行できなかった (Th-a II, p. 148)。『清浄道論』は、五根中の信根が強力過ぎると他の四根が適切に働けないとし、特に信根と慧根とのバランスを重視する中で、彼の名を挙げている (Vism pp. 129-130)。ヴァッカリは後に釈尊の助言によって観察行を成就し阿羅漢となるが (Th-a II, p. 149)、五根のうちの信根に特化した者と考えられている (Th-a III, p. 208)。仏道修行において、Ś は強ければ強いほど良いというわけではないのである (その他 cf. A I, p. 59, Mp II, p. 117.) (⇒古川 [2019a][2019b])。

3. Ś の成立構造

ヴァッカリの事例は、Ś が、「慧に比べて劣位にあり、慧による解脱に至る過程としての意義を担っているに過ぎない」とされるような (Cf. 藤田 [1992:100-101])、修道論上の位置付けとは別の側面を有していることを示している。

この点を示されている事例の一つとして、舍利弗・チッタ居士・シーハ將軍の3人の事例を挙げることが出来る。S 48.44 で釈尊は阿羅漢である舍利弗に「五根の多習が涅槃に至ること」(趣意)をŚしているかと質問する。質問に対し舍利弗は、上記の「世尊の〔言葉を〕Śして歩み出すことはない」(na … Bhagavato saddhāya gacchāmi) と答える (S V, pp. 220f.)。この場合、舍利弗は釈尊の言葉を疑っているのではなく、既に自ら慧によって知見し釈尊の言葉の内容が真実であることが分かっているために、釈尊を含む他者の言葉をŚする必要がないと述べている。本例におけるŚの対象は五根の多習が涅槃に至ることであり、五根中の信根の内容である「如来の覚りをŚすること」と同一ではない点には注意を要する。阿羅漢には、前述した五根を円満した「Śを最もよく具えた者」という側面と、すでに解脱しているので他者の説く言葉(解脱に到る道)をŚする必要がないという意味での「不信の者」の側面が認められる。

こうした「不信」は、阿羅漢に至っていない在家信者にも成立し得る。チッタ居士はニガンタ・ナータプッタとの対話の中で、既に四禪を習得し知見しているために「第二禪が実在する」という釈尊の言葉をŚして歩み出すことはないと述べる (S IV, pp. 298f.)。同様にシーハ將軍は、布施の果報7つのうち現世

で確認できる6つについては既に知っているために釈尊の言葉をŚして歩み出すことはないが、残りの生天に関しては知らないので釈尊の言葉をŚして歩み出す、と答えている (A IV, p.82 = A III, p. 40)。

シーハ將軍の事例に明示的であるように、Śには、自ら知見出来ないものをŚし、知見した場合にはŚする必要がなくなるという成立構造が認められる。この構造は、仏教以前に成立したブラーフマナ文献等に使用されるŚの用法、及び「眼・見ること」=「真実」(satya)という考え方を受け継いだものと考えられる (⇒古川 [2022])。

4. 出家と布施に付随する Ś

4. 1. saddhā (信) をもって出家する

その他、パーリ聖典内には、仏弟子が出家の際に「saddhā (信) をもって〔家から家でない状態に〕出家する」(saddhā[ya] + [agārasmā anagāriyam] pra-√vraj / nis-√kram) という定型表現が用いられる (S I, p. 198, Th 789 etc.)。この saddhā の本質は一見想定しがちな如来に対するものではなく (⇒2. 1. Cf. 清水谷 [2010])、自身が苦に苛まれていることを自覚した上での、「きつとこの苦のあつまりすべての終末が洞察され得る」(… app eva nāma imassa kevalassa dukkhakkhandhassa antakiriya paññāyethā ti.) という「確信」にある (M I, p.463)。出家者は、自身が将来解脱出来ると確信して出家しているのである (ただし、このŚが解脱を保証するわけではない)。saddhā をもって出家することは仏弟子にとってあるべきものとされるが、外教の苦行者にも同様の saddhā が確認出来ることから (S IV, p. 337)、仏教に限定されない性格のものであることが分かる。

出家に伴う saddhā の中には、時に出家後の行動が saddhā をもって出家した者にとって適切／不適切であると釈尊等から指摘される事例が散見される。不適切な事例には「比丘尼との過度な交際」や「贅沢な衣をまとうこと」など出家者の外的行為に関する事柄も多く含まれる。このことは、Śが一時の判断だけではなく、出家後も持続的に仏道修行を支えるものと見なされていたこと、また、Śがそれを具える者の具体的行動に表われる側面を有していることを示

している。saddhāをもって出家した (saddhāpabbajita) 比丘中の第一人者とされるラッタパーラは、両親に出家を反対される中で命を危ぶむ断食を執行し出家を成功させた人物である (M 82)。ラッタパーラの出家を成功させた断食行為は彼のśの外的行為への表出と考えられ、出家後の速やかな成阿羅漢とともに、śが強く発揮された事例と言える (⇒古川 [2014])。前出のヴァッカリの場合は、釈尊の傍に居ようとする行動に彼のśが現われているのであろう (Cf. S III, p. 120, Mp I, p. 249, Th-a II, p. 247, etc.)。

4. 2. saddhā (信) をもって布施をする

saddhāをもって出家することとは別に、パーリ聖典中には、在家者が布施をする際、しばしば「saddhā (信) をもって布施する」(saddhāya + √dā) という表現が定型的に使用される。本 saddhāya は実名詞である (Cf. Ja IV, p.381[497-4])。本 saddhāの内実に関してPv 20を参照すると、餓鬼が阿闍世王に対し次のように語る部分がある。

〈引用②〉

so sūcikāya kilamito tehi ten' eva ñātisu yāmi āmisakiñcikkhahetu

adānasilā na ca saddahanti: dānaphalaṃ hoti paramhi loke. (Pv p.29[20.3])

(餓鬼)「その私(餓鬼)はそれら〔悪業〕故に針により苦しめられているので、

まさにそれ故に、私は何らかの食物のため親族達のもとに赴いた。

だが、彼等は布施の習慣がなく、『あの世で布施の結果が生じる』〔と〕śrad-√dhāして(信じて)いなかった。』

引用下線部に示すśの内容に基づけば、布施行為に付随して用いられるśは、業と輪廻の思想を前提とした、自身の布施の結果として将来功德・福德がもたらされると「信じること」を内実としていることになる。Köhler[1973:59-63]は本 saddhāに仏教以前から続く Spendefreudigkeit (布施を好む

こと)としてのŚの名残りが認められると指摘し業果に対する「信」をパーリ聖典よりも後に生まれた特殊な教義解釈と解するが、聖典段階から存在する理解であることは明らかである。

上記の2つのŚは、仏に対する「信」とその本質を異にするものの、無関係というわけではない。前出のラッタパーラはコーラヴィヤ王との対話の中で自身の出家の背景を答える際、四方からそれぞれやって来てその様子を語る *saddhāyika* (信の置ける者) の言葉を聞き、四方それぞれの先にある地域を征服するという喩えを用いる (M II, pp. 71-72)。この比喩中の *saddhāyika* とは、ラッタパーラにとっては釈尊 (仏) に他ならない。仏弟子の解脱の「確信」としての出家に伴う *saddhā* は、解脱までの道筋を説き示す仏に対する「信」を前提としていると言える。

また前出の Pv 20 では、餓鬼が自身の利益を指定 (*ā-vaḍḍis*) した上での仏や僧団への施食や衣の布施を指示し、王が僧団への布施を行う流れになっている。聖典において、仏は個人として最も功德の大きい布施対象に位置付けられる (A IV, pp. 395f.)。 *paśāda* の例では、僧団が無上の福田であることがしばしば強調され (D II, p.94, Sn 82 etc.)、心が *pra-vaḍḍas* する者に対して布施すべきであると説かれる (S I, p.98)。Śの事例のみからは明らかにならないが、在家信者が *saddhā* をもって布施をする場合、布施対象が功德の源泉足り得る (=自身に功德をもたらしてくれる存在である) という「信」が背景にあると考えるのが自然であろう。

5. 「信」と「欲望」の関係

第1節で述べたように、Köhler 氏の主張する Ś の「欲望」の意味の古さについては近年、疑義が呈されている。パーリ聖典中の「欲望」としての Ś の是非に関して、最後に Norman[1979] が提示する視点について一言しておこう。

Norman[1979] は Dh 97 の考察の中で、時に Köhler[1979] を援用しつつ、① 通常肯定的に扱われる Ś が否定的に扱われる場合があること、② Ś が *rāga* (熱望) と並行して使用される事例が認められることの2点をもとに、Ś に「欲望」

(desire) の意味を設定する。上記①について、Norman[1979]が取り上げるのは宗教的に勝れた者のŚが否定的に表現される事例であるが⁵ (Dhp 97a: assaddha; Sn 853d: na saddho)、本Śを「欲望」と解する必要はない。なぜなら、第3節に言及したように、すでに知見しているのでŚする必要のない「不信の者」と解し得るからである。実際、前掲のDhp, Snの註釈はそのように説明する (Dhp-a II, p.187; Nidd I p.235, Pj II, p.549)。また、否定的に扱われるŚに関して外教者のŚや外教の師に対するŚが使用される例に注目すると、宗教的立場の違い、善悪の結果の相違といった区別に関わりなくŚが使用される。このことは、Śが否定的な文脈で使用される場合Śの対象が問題視され、Śそのものは中立的なものであることを示している (⇒古川 [2018])。

②について、Norman氏はSn 853d: na saddho na virajjati (Śを具えておらず、醒めることもない) がSn 813d: na rajjati na virajjati (熱望することなく、醒めることもない) とパラレル関係にあると述べ、Sn 853d: na saddhoをSn 813d: na rajjati (not impassioned) と「欲望」(desire) の方向で理解する (Norman[1979:191-192])。しかしながら、Śがrāga (熱望) と並行して用いられることが即、「欲望」の意味をも持つことを示すことにはならない。

Śとrāgaの対応については、Th 246-247が参考になる。伝承によれば、サーティマッティカ長老が帰依させた人々が魔の仕業により長老を誤解し不信 (appasāda) を生じさせた。後に長老はその原因を探り、神通力を用いて魔を調伏した。それを見た資産家は長老に許しを乞うが、長老は次の偈を語ったとされる (Th-a II, pp. 99f)。

〈用例③〉

ahū tuyhaṃ pure saddhā, sā te ajja na vijjati.
 yaṃ tuyhaṃ tuyhaṃ ev' etaṃ; n' atthi duccharitaṃ mama.
 aniccā hi calā saddhā evaṃ diṭṭhā hi sā mayā;
 rajjanti pi virajjanti, tattha kiṃ jiyate muni. (Th 246-247)

①以前、君には saddhā (信) が存在したが、今や君のそれ (saddhā) は見付

けられない。

君のもの、それは君だけのものである。私に悪行は存在しない。

というも、saddhā (信) は非恒常的 (無常) で揺れ動くものであるから。

以上のように、それ (saddhā) が私により見られているのであるから。

②人々は、〔はじめは〕熱望していても、〔後に〕醒めるものだ。その点に関して、どうして寡黙の賢者が負けることがあろうか〔負けることは無い〕。

本例では、下線①のsaddhāの有無と下線②の√raj, vi-√rajに対応関係が認められる。しかし、前者のsaddhāは「君 (家長)」のもの、後者の主語は不特定多数の「人々」であり、Ś (信) と「欲望」の要素 (√raj) が何らかの因果関係が指摘出来ることを示すに過ぎない。このことは、A 3.42で戒を具えた者に見えることや聞法といった具体的行動に対する「欲望」(kāma, √is) を有する点、saddha, pasannaであるかどうかの判断基準の一つとして提示される事例と一致する (A I, p. 150 ⇒ 2. 1の聞法とŚ)。これらの例では、Śと「欲望」の要素とは別のもので扱われている (その他 cf. Ja III, p.88[326.103])。諸例に明らかのように、パーリ聖典においてŚとrāga等の「欲望」に関する語は区別されており、両者が意味上重なるものとして使用されているようには思われぬ。

Śが否定的に使用されているケース、Śが「欲望」の要素 (rāga) と並行して使用されるケース、いずれにおいても、各々のŚを「信」の意味で理解することに支障は見当たらない。ラッタパーラの事例の際に述べたように、Śには一時の判断だけではなく、抱いた後も当人の外的・内的行為に表れる性格が認められる。「欲望」の要素はその一つと考えられるが、註釈文献の段階になると、このŚと「欲望」の要素の結びつきがさらに強化されていく。『清浄道論』では、rāgaと同様、saddhā (信) が主体的に戒等を欲する (√is) のものと説明され、積極的に「欲望」の働きを有するものと理解されている (Vism p. 102)。しかしこれとて、Śが「信」の意味で理解されていることはパーリ聖典と異ならない (Cf. 古川 [2019a])。

まとめ

本論では、パーリ聖典中に用いられる Ś の基本的な構造の素描を試みた。パーリ聖典中の Ś は、三宝のうちの仏の覚者性に対する Ś (信) を中核とし、仏の説く教え (法) への Ś (信)、出家後の解脱への Ś (確信)、布施行為の結果 (功德) に対する Ś (信) などが組み合わさることで形成されている。舍利弗等の「不信」、そしてヴァッカリ、ラッタパーラの事例に見たように、Ś には初期仏教の修道論の枠組みの中に収まり切らない性格が認められるが、パーリ聖典全体としては、「信」を基本的意味とする語として機能している。Ś の中には、時に「欲望」を意味する語と関連・平行して用いられるケースが認められるものの、こうした事例をもとに本語そのものを「欲望」と理解することは出来ない。パーリ聖典中の Ś に「欲望」の意味を設定することには、抑制的であるべきである。

注

- 1) Ergardt[1977], Hoffman[1987], Gethin[1992: 106-112]
- 2) Gethin[1992: 106-112]は cognitive, affective などキリスト教神学で用いられる区分によって Ś を理解する方法に注意を促すものの、結局 Jayatilleke の区分に従い Ś を affective なものとして理解してしまっている。
- 3) 例えば、藤田 [1992:99-100]は類義語 pasāda をもって Ś が静寂的・沈潜在的な性格を有することを強調するが、Gethin[1992: 107-108]は本語を affective な面をもつ語として取り上げ Ś を論じる。
- 4) Vism p. 464; *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubhandhu*, ed. by Pradhan, 1967, p. 55.
- 5) *Abhidharmasamuccaya* ed. by Gokhale, 1947, p. 16. その他の定義的用例については榎本ほか [2014], 仏研 [2014] を参照頂きたい。
- 6) 生天に関わる Ś について、勝本 [1999:80] は Ś のみで天界に往生すると断言は出来ず、必ず他の行 (特に布施) と合わせて説かれていると指摘する。
- 7) 註釈によれば、この saddhā は如来が覚者であると Ś することである (Sv I, p. 180, Ps II, p. 204)。
- 8) … puriso maggakusalo ti kho, Tissa*, Tathāgatass’ etaṃ adhivacanāṃ arahato sammāsambuddhassa. (S III, p.108) 「ティッサよ、知つての通り、道に通じている人間というこれは、阿羅漢・正等覚者である如来の同義語である」*Ee Tissā; Be, Se Tissa. Be, Se に従い改める。

- 9) 聞法とŚの結びつきは、梵天勸請の際の釈尊の説法決意の偈 (Vin I, p. 7 etc.) にも認めることが出来る。この点については古川 [2023] を参照頂きたい。
- 10) 藤田氏はŚから慧の構図の中で慧によって知見した者には「もはや何人に対する信も — ブッダに対する信も — 必要としない」と述べた上で阿羅漢の「不信」に言及するが (藤田 [1992:100-101])、本文に提示した例に明らかなように、阿羅漢はいかなるŚも持ち合わせていないのではない。藤田氏の主張はŚの対象を厳密に区別しておらず、誤解を招く。この点については第3節を参照のこと。

略号一覧

本資料中のパーリ語テキストは Pali Text Society 版を底本としている。パーリ文献の略号は Margaret Cone, *A Dictionary of Pāli* の略号一覧に従う。異読は必要な場合のみ提示する。

- Ergardt, J. T. 1977 *Faith and Knowledge in Early Buddhism*, Leiden: E. J. Brill.
- Gethin, R. 1992 *The Buddhist Path to Awakening: A Study of Bodhi-Pakkhiyā Dhammā*, Leiden: E. J. Brill.
- Hacker, P. 1963 “śradhā”, *Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd- (und Ost-)asiens*, 7, pp.151-189 (=Kleine Schriften pp.437-475).
- Hoffman, F. J. 1987 “The Pragmatic efficacy of saddhā”, *Journal of Indian Philosophy*, 15-4, pp.399-412.
- Hinüber, O. von. 1996 *A Handbook of Pāli Literature*, Berlin/New York: Walter de Gruyter.
- Jayatilke, K. N. 1963 *Early Buddhist Theory of Knowledge*, London: George Allen and Unwin.
- Köhler, H. W. 1973 *Śrad-dhā- in der vedischen und altbuddhistischen Literatur*, Diss. Göttingen, hersg. von K. Janert (= Glasenapp-Stiftung Band 9), Wiesbaden: Franz Steiner Verlag.
- Norman, K. R. 1979 “Dhammapada 97: A Misunderstood Paradox”, *Indologica Taurinensia*, VII, pp.325-331 (=Collected Papers vol. II, 1991, pp.187-193).
- 榎本文雄 (代表), 河崎豊, 名和隆乾, 畑昌利, 古川洋平 2014 『ブッダゴーサの著作に至るパーリ文献の五位七十五法対応語 — 仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集—バウツダコーシャIII』 *Bibliotheca Indologica, et Buddhologica* 17 東京: 山喜房佛書林.
- 勝本華蓮 1999 「原始仏教における信仰と天界往生」『*仏教文化*』 9, pp. 75-99.
- 後藤敏文 2007 「śradhā-, crēdō の語義と語形について」『*論集*』 34, pp. 578-561.
- 阪本 (後藤) 純子 2008 「「水たち」 āpas と 「信」 śradhā- — 古代インド宗教における世界観—」『*論集*』 35, pp. 110-89.
- 阪本 (後藤) 純子 2015 『生命エネルギー循環の思想 — 「輪廻と業」理論の起源と形

- 成一』RINDAS 伝統思想シリーズ24.
- 清水谷善暁 2015「原始仏教における saddhā の一考察 — 出家の契機となる側面を中心に —」『佛教学』52, pp.(1)-(17).
- パウッターコーシャ・プロジェクトチーム 2014「śradhā/saddhā の訳語をめぐって」『仏教文化研究論集』17, pp.3-64. (= 仏研 [2014])
- 藤田宏達 1992「原始仏教における信」『仏教思想11 信』京都: 平楽寺書店, pp.91-142.
- 古川洋平 2014「信を伴う出家と世俗の価値観との相克」, 『日本佛教学会年報』, 80, pp. 161-187.
- 古川洋平 2015「パーリ聖典中の信の構造に関する一考察 — 動詞形の格支配に注目して —」『印度學佛教學研究』64-1, pp. 297-294.
- 古川洋平 2018「パーリ経典中の śrad-√dhā の意味について — Norman 説に注目して —」『印度學佛教學研究』66-2, pp. 917-913.
- 古川洋平 2019「パーリ聖典における śrad-√dhā の内容検討 — 「信」と「欲」をめぐる本語の意味に関連して —」『『義足経』研究の視座: 附・訓読』, 京都: 自照社出版, pp. 39-55. (= 古川 [2019a])
- 古川洋平 2019「パーリ文献中の saddhādhimutta について — 第一人者の伝承に基づく訳語の検討 —」『パーリ学仏教文化学』33, pp. 21-38. (= 古川 [2019b])
- 古川洋平 2019「saddhādhimutta について — ヴェッカーリ伝承に見る信の側面 —」『印度學佛教學研究』68-1, pp. 492-497. (= 古川 [2019c])
- 古川洋平 2022「「信」の成立構造について: 「見ること」と「信じること」」, 『印度學佛教學研究』71-1, pp. 425-420.
- 古川洋平 2023「インド仏教における「信」(saddhā/śradhā) の系譜 — 梵天勸請説話から『法華経』「方便品」へ —」, 『仏教東漸の道 インド・中央アジア篇』シルクロード研究論集第1巻, (公財) 東洋哲学研究所, pp. 35-59.

